

リカバリーカレッジにおける共同創造にはどのような価値が見出されるか

ー精神的困難のある当事者の視点からー

○ 東北福祉大学 黒田 文 (2095)

リカバリーカレッジ、共同創造／共同制作、当事者

1. 研究目的

本研究の目的は、日本国内のリカバリーカレッジ(以下、RCと記す)にて、専門職スタッフと一緒にワークショップ講座を共同プロデュース、共同提供した精神的困難のある当事者(以下、当事者と記す)がこのプロセスをどのように捉えているかを探ることである。RCの原則は、当事者と専門職スタッフの双方が講師／トレーナーとして一緒に講座を創りあげるだけではなく、共同ファシリテーターとして講座を提供し、リカバリーに関する学びを促進することである¹。当事者と専門職の共同創造／共同制作(以下、共同創造と記す)はRCの中核と位置づけられ、その活動は日本でも広がりを見せている。しかし、当事者が共同創造をどう捉え、価値づけているかについては情報が不足している状態である。そのため本研究は、RCの共同創造が当事者にとってどのような意味を持つのかを探り、今後のRCの展開について考察する。

2. 研究の視点および方法

リカバリー志向の実践は精神保健医療福祉サービスの主流となっており、当事者の生きた／生きられた経験を専門知とみなし、希望、自己効力、自己管理を促進することを目的に展開される²。RCは2009年に英国で開設され、共同創造を基盤に当事者、家族、専門支援スタッフがリカバリーに役立つサービス(講座)を利用できるよう門戸を開く場である。RCは教育アプローチを採用するが、それは教師が知的権威をもっている伝統的なアカデミック教育とは異なり、制限の少ない「大人の学び」を重視する³。RCでは共同創造の原則にもとづき、当事者と専門職スタッフの両方が、共同ファシリテーターとして、講座の学びを促進するため、その準備から運営、評価を共同で行う。本研究では、当事者がこのプロセスについてどのような意味付けをしているかを探るために、RCの運営に2年以上関与してサービス(講座)を企画・提供・評価した経験がある当事者を対象に半構造化されたききとり面接を個別に実施した。データは、許可を得て録音した内容をテキストデータ化し、自然言語処理ソフトを用いて分析した。当事者が共同創造について解釈した特徴的語句や表現に着目し、何に対してどのような価値づけをしているかを抽出した。2025年2月からインタビューを開始して、5月現在でデータ処理が終了した4名の分析結果を報告する。

3. 倫理的配慮

本研究は、研究代表者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得た上で実施している(承

1-3 文献は発表当日に示す。

認番号:RS241101)。本研究について報告すべき利益相反はない。

4. 研究結果

当事者が捉える共同創造について次のような内容が抽出された。

1. 対等な関係性の構築: 共同創造は、完全な対等性を目指しているが現実的には厳しい。その現実の中で知識や経験の差を認めて、互いに譲り合い、バランスを取りながら進めていくプロセスである。
2. 相互学習のアプローチ: 単なる知識の伝達ではなく、当事者と専門職が互いの経験を共有し、学び合う双方向的な学びがある。当事者の経験を中心に据え、その経験から互いに学ぶことができる。
3. 自由な対話と意見表明: 共同創造には参加者が自由に意見を述べ、反論も許される開かれた対話環境がある。肯定的な意見だけでなく、批判的な意見も建設的に議論できる。
4. 時間をかけた丁寧なプロセス: 効率や速さを優先せず、ゆっくりと丁寧に対話を重ね、互いを理解し合うことを大切にする。ゆっくりとしたプロセスに意味がある。
5. 自主性と主体性の尊重: 当事者が自発的に選択し、主体的に参加できることが共同創造の本質。強制ではなく、自分の意思で参加し、学ぶことが重要。
6. 意識改革のプロセス: 共同創造は、当事者と専門職の両方にとっての意識改革になる。互いの立場や視点を理解し、従来の力関係性を超えていく試みである。
7. 安全で安心できる場の創出: 参加者が安心して自分の経験や感情を共有できて、互いを尊重し合える信頼関係のある環境づくりが行われる。
8. 継続的な学びと成長: 共同創造は、一方的な知識の伝達ではなく、講座を作る過程そのものが学びになっており、参加者全員が成長できるプロセスである。
9. 当事者の困りごとの反映: 当事者自身の困りごとや必要としていることを、直接に講座やプログラムに反映させていく仕組みになっている。

性別	男性: 3名、女性: 1名
年齢	40代: 1名、50代: 3名
診断名	統合失調症: 2名、鬱: 1名、 双極性障害: 1名
平均罹患期間	約22年
平均入院回数	約11回
施設の平均通所期間	8年 (0~3ヶ月: 1名、1年~ 14年: 3名)
RC運営メンバー歴	2~4年: 2名、5~7年: 2名

RCで共同創造を促進するには、当事者の言葉と経験を真に理解し尊重する、当事者の声を抑圧しない意識、専門職の当たり前を押し付けない姿勢、知識の一方的な提供を避けるコミュニケーション、当事者の成長プロセスを尊重すること、無意識のバイアスに専門職が気づくこと、等が求められている。

5. 考察

RCの共同創造は、互いを尊重した学び合い、成長を促す複合的で動的なプロセスと捉えられる。ここには、従来の上下的な関係、一方的な支援を超える関係性の構築を目指す実践的なアプローチが埋め込まれていると考えられる。RCが模索する共同創造は、形式的な対等性ではなく、内実を伴った相互理解と尊重だが、その道のりは険しいと考える。

謝辞: 本研究は、公益財団法人ユニバーサル財団の研究助成をうけている (24-02-224)。